



2026年7月10日発行

熊本学園大学外国語学部東アジア学科

学科の最新ニュース

今年度、東アジア学科では 59 名の新入生を迎えました。さらに、特任准教授の辛教燦（シン・ギョチャン）先生が加わり、新たな気持ちでスタートを切りました！

■ 巻頭言



今年度から東アジア学科長に就任した黒島規史です。専門は言語学で、特に韓国語の文法を研究しています。私は群馬県出身で、大学進学とともに東京に出て、そのまま東京の大学で博士課程まで終えました。

幸運な巡り合わせもあり、6 年前に初めて熊本に来ました。

私自身も 20 年前に大学で韓国語（朝鮮語）を専攻したのですが、新入生を前にするたびに、当時の自分の姿を思い出します。とにかく韓国語が学びたい

東アジア学科長 准教授 黒島規史（韓国語文法）

一心で、がむしゃらに受験勉強して入った大学。初めての一人暮らしということもあり、期待と不安が入り交じった気持ちでした。あの頃の私のように、きっと新入生たちも韓国語、中国語を一生懸命学びたいと思ってここに来てくれたんでしょう。その中にはもしかしたら不安を抱えている学生もいるかもしれません。

そんな学生たちが自分の学びたいことを、思いっきり学んでもらえるように、学科長としての責務を果たしつつ、全力でサポートしていきたいと思っています。これからどうぞよろしくお願いいたします。

□ 研究紹介



みなさんは、韓国の大ヒット歴史ドラマ『根の深い木』や、その原作小説をご存じでしょうか。ハングルを創製した名君・世宗（セジョン）大王を主人公に、息をのむサスペンスが描かれた名作です。私の研究で

は、こうした作品を単に楽しむだけでなく、「なぜこの物語がこれほど私たちを魅了するのか」「物語がメディアを越える時、何が再構築されるのか」という謎を、歴史や思想の視点から学問的に解き明かしています。具体的には、小説がドラマへと脚色される過程で起こる「メディア変容」を分析しています。

実はハングルの誕生は、単なる「便利な文字の発明」ではなく、壮絶な「知識の闘争であり革命」でした。原作小説は、宮廷での連続殺人事件の捜査や王の暗殺陰謀に立ち向かう、スリリングな「宮廷ミステリー」です。魔方陣や陰陽五行、天文学といった知的な暗号の謎解きプロセスを通じて、新しい文字が宇宙の法則や科学的根拠とどのように結びついているのかをロジカルに究明していく面白さがあります。

一方で、これがドラマへと「メディア変容」を遂げると、物語は既存の秩序と「主権在民」の思想が激突

東アジア学科特任准教授 辛教燦（韓国文学・文化）

する重厚な政治スリラーへと昇華します。特権階級による知識や漢字（情報）の独占に立ち向かい、文字を持たずに搾取される民の過酷な「生の重み」に直面した世宗は、文字を民へと開放する「権力の再分配」に命を懸けます。小説の緻密な謎解きは、ドラマにおいて、民を政治の主体として目覚めさせる現代的なメッセージを放つ人間ドラマへとダイナミックに変容を遂げるのです。

私は本作に限らず、小説から映画、古典からデジタルコンテンツなど、様々な文学作品のメディア変容を追究しています。メディアを横断的に研究することで、原作の文字を追うだけでは決して見えてこなかった思想的背景や、社会の受け止め方の変化といった「新たな発見」が次々と生まれます。メディア変容を研究することは、文学作品を現代の視点で再解釈・再考し、そこに込められた真のメッセージを深く読み解く旅です。みなさんも、普段楽しんでいる物語を少し違った「研究者の目」で覗いてみませんか。きっと、その裏に隠された新しい世界が見えてくるはずです。

■ 出張日記

2024 年の 11 月に日本語教員養成課程の実習の引率でソウルに出張する機会があった。留学していた頃とは異なり、最近ではソウルでうろうろすることもなかなかできず、空港の利用や資料の調査くらいだったのだが、仁川空港から出張先の語学学校まで乗ったバスがひどい渋滞に巻き込まれたお陰で、ただ車窓から漢江を眺めるだけの時間が 2 時間ほど生じた。住んでいた下宿はどうなったかな。すぐクビになった家庭教師のバイトは向こう側のあの辺だったっけ。真冬に散歩のつもりで歩いてこの橋を渡ったときは寒かったな。留学中にお世話になった方々

東アジア学科講師 高橋春人(韓国語学)

…様々なことが思い浮かんだ。もちろん、到着後に挨拶しなければならない実習先のことや、市内に寄りたいところがあるからと一人でスタスタと地下鉄に乗って行ってしまった学生のことなども心配だった。結局は学生の方が先に着いてしまい、どちらが引率しているのか分からなくなったが。ともあれ、実習先でも韓国でよく感じる「前から知り合いだったかのような雰囲気」で歓迎していただき、着任初年度の「初めてのおつかい」は何とか終えることができたのだった。

□ 東アジアへのまなざし

2024 年 12 月 3 日、韓国の尹錫悦(ユン・ソンニョル)元大統領は突然の非常戒厳令を宣布した。これを受けて市民たちは尹錫悦氏の弾劾、罷免を求めるデモを日夜繰り広げた。そこで印象的に報道されたのが、デモ参加者が手にしていた、コンサート等で使われるペンライトだ。韓国ではデモを行う際にろうそくを持ち寄る文化が根付いていたが、2016 年の朴槿恵(パク・クネ)元大統領の退陣を求めるデモを見た、ある与党議員の「ろうそくは風を吹けば消える」という発言に反発し、簡単には消えないペンライトを持ち寄りだした。デモに注がれた人々の視線には様々なものがあったが、わたしはこれと似

東アジア学科准教授 黒島規史(韓国語文法)

た、まったく別の現象を思い出していた。

山形県の一部の地域では、お盆の時期、軒先にてるてる坊主のように、おもちゃの車や電車などを吊るした光景が見られる。一般的にナスとキュウリでつくる精霊馬の代わりに、誰となく始めて広まった風習らしい。そこには、ご先祖様がより快適に帰って来てほしいという思いが込められているのだと言う。

ペンライトやおもちゃの車を見て、軽薄だと思う人もいるかもしれない。しかし、変わりゆく文化の裏側にある人々の想いに、わたしはなぜか心が動かされる。

■ 新刊紹介

1940 年代の日本統治期台湾で異彩を放つ小説を発表し、戦後は「蕃地」(1953)で新潮社文学賞を受賞、「蕃婦ロポウの話」(1960)などで芥川賞候補にも挙げられたものの、ほとんど忘れられてしまった女性作家がいる。熊本県八代出身の坂口櫛子(さかぐち・れいこ 1914-2007)である。坂口は、「植民地」という言葉に絡まる問題を、実体験と実作によって深く捉えようとした。とくに、台湾山地における日本人と先住民のあいだに生じた軋轢や愛情の文学は独自性に富む。

拙著『台湾山地を愛した女—坂口櫛子の生涯と創作』(明石書店、2026 年 2 月)は、この「女」の生涯と創作を著した初の評伝だ。私は本書を、「第 1 部 球磨川の流れる町—八代時代」「第 2 部 文壇への扉—台湾時代」「第 3 部 蕃地をめぐる戦後創作—熊本時代」「第 4 部 上京後の彷徨と郷愁—東京時代」と

東アジア学科教授 小笠原淳(中国現代文学)

して構成し、時と空間を移ろう坂口の足跡を追った。さらに巻末には、未発表小説「樹霊」を収録している。

坂口は、周縁に生きる人間の命を愛おしみ、時に力強く、時に脆い存在として、描きだす。彼女自身も周縁に身を置いて、移動と越境を繰り返し、苦難の中で強く生きぬき、書き続けた。本書を手に取り、その波乱万丈の生涯から紡ぎ出される坂口の文学世界を体感していただきたい。どの章から読み始めても、読み手をその時代と空間へと誘ってくれるはずだ。



発行者 熊本学園大学外国語学部東アジア学科

編集人 黒島 規史(東アジア学科長) 〒860-8680 熊本市中央区大江 2-5-1 Tel 096-364-5161 (代)